

動作性を持つ日本語 [V+N] 型複合名詞の成立条件

劉 犀灵

要旨

日本語の「動詞連用形＋名詞」で構成される[V+N]型複合名詞は「食べ物」「飲み水」のような名詞的意味を表すものが多いが、中には「買い物」「打ち水」のような動詞的意味を表すものも観察される。本稿では動作性を持つ[V+N]型複合名詞に着目し、その成立条件について考察した。その結果、動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件として、①VとNが「他動詞－目的語」関係である、②Vが[V+N]型複合名詞の主体クオリアで、かつ[V+N]には潜在的な目的クオリアが存在しない、③VかNを共有する動作性[V+N]型複合名詞が既存である、④[V+N]型複合名詞の表す動作が想起されやすい、⑤NがVの格成分でない場合、V以外にNと共起性の高い動詞が容易に推定できることが挙げられる。本研究は動作性を持つ[V+N]型複合名詞の研究に新たな示唆を与えるとともに、日本語学習者のこの型の複合名詞の習得にも貢献するものである。

キーワード：[V+N]型複合名詞 動作性 成立条件 クオリア構造

1. はじめに

和語の複合語においては句構造と平行的に主要部は後側（右側）に配置される。主要部というのは合成語全体の範疇を決定する要素である。日本語の合成語においては一部の例外はあるものの、「右側主要部の規則」¹ (Righthand Head Rule) が一般的に成り立つと考えてよい（影山 1993：21-22）。「古本」を例にすると、複合語の品詞は右側要素の「本」と一致していることがわかる。つまり、右側要素の「本」は複合語「古本」の主要部である。「右側主要部の規則」に従えば、日本語の「動詞連用形＋名詞」型複合語（以下は[V+N]型複合名詞と称する）は名詞を主要部とし、構成要素の関係が修飾関係で、複合語全体が名詞的意味を表すのが一般的である。しかし、その中には「買い物」「打ち水」のように構成要素の関係が修飾関係と補足関係で、複合語全体が名詞的意味と動詞的意味を併せ持つものも観察される。

- (1) a. 飲み水, 置き場, 食べ物 (＜修飾関係＞名詞的意味)
b. 打ち水, 置き手紙, 買い物 (＜修飾関係＞名詞的意味,
＜補足関係＞動詞的意味)

(1a) と (1b) の [V+N] 型複合名詞は同じような語構造で、かつ一部の構成要素を共有しているにもかかわらず、複合語の意味は異なっている。(1a) グループの語は名詞的意味を表すモノ名詞である（例：「食べ物」→「食べる物」）のに対して、(1b) グループの語は名詞的意味を表すモノ名詞（例：「買い物」→「買う物や買った物」）

¹ Williams (1981)を参照されたい。

でもあるし、動詞的意味を表すコト名詞（例：「買い物」→「物を買うこと」）でもある。本稿では（1b）グループのような動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件がどのようになっているかを明らかにしたい。

2. 先行研究と本研究の目的

日本語[V+N]型複合名詞についての研究はほとんどこれを複合名詞の一つのタイプとして言及することに留まり、体系的な研究が少ない。[V+N]型複合名詞の動作性に関する研究はさらに少なく、動詞的意味の発生要因と動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件を論じる文献はわずかしか散見されない。

松下（1928）は、「買い物」「貸し本」「付け火」など内部要素間に修飾関係を持つ、物を表す語が転じて作用を表す語になったと主張している。「買い物」は「物を買う」ではなく、「買い物」という物を表す語が抽象されて作用を表す語になるのであるとし、同じような現象として「銀行」「靴屋」「官吏」を挙げている。松下（1928）は、これらの語が動作性を持つ理由として「銀行をする」「靴屋をする」「官吏をする」と言い得るからだとして述べているが、筆者は「銀行をする」「靴屋をする」「官吏をする」の動詞句全体が動詞的意味を表すのは「銀行」「靴屋」「官吏」自身が動詞的意味を表すのではなく、「する」が職業を表す本動詞であるからだと考えている。

Sugioka（1986）は、動作性を持つ[VN・N]複合語（本稿の[V+N]型複合名詞に当たる）が形成される動機として漢語借用語の[V O]語順の影響を受けた可能性があるとして述べている。

影山（1993）は、[V+N]型複合名詞が動詞的意味を表す現象について隠語、比喻による意味の転換、名詞意味の拡張と解釈している。しかし、意味拡張の条件については述べていない。

西尾（1998）は、[V+N]型複合名詞の動詞的意味の発生について、「V+N」という基本的な造語法がもともと存在する、また漢文訓読による発生という要因を推測している。

以上の文献は主に[V+N]型複合名詞の動詞的意味の発生する要因についての分析である。どのような[V+N]型複合名詞が動詞的意味を表しやすいか、つまり動作性を持つ条件について初めて論じたのは金（2016）である。金（2016）は、[V+N]型複合名詞の意味と構成要素間の関係から[V+N]型複合名詞の動作性の成立条件を分析し、次のようにまとめている。「一、意味の転移が起きず、意味の結合が透明であること。二、語内部の構造が修飾関係のみならず、項関係（特に目述関係）にもあること」。しかし、この条件で判断すればいくつかの反例が出てしまう。例えば、「食べ物」は項関係を持ち、かつ複合名詞の意味の転移が起きていないが、動作性を持たない。そのため、「意味の転移」という条件についてはさらなる検討が必要である。条件二の「語内部の構造が項関係である」という条件について基本的には問題はないが、「歩きタバコ」のような内部構造が項関係でない語も存在する。このように辞書には載っていないが日常生活によく使われる語について説明する必要があるだろう。

以上の先行研究は主に[V+N]型複合名詞の動詞的意味の発生する要因についての

分析である。筆者は影山（1993）の「名詞意味の拡張」という観点に同意する。ただし、すべての[V+N]型複合名詞が動詞的意味を持つわけではない。どのような[V+N]型複合名詞が名詞から動詞へと意味拡張が発生し得るのかについて先行研究では明らかにされていない。金（2016）は動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件について論じているが、いくつかの反例があり、さらに検討する余地があると考ええる。本稿では[V+N]型複合名詞の内部構造、Vと[V+N]型複合名詞のクオリア構造との関係、[V+N]型複合名詞の表す動作の想起されやすさ、同じ構成要素を共有する動作性[V+N]型複合名詞の既存語の多寡などの面から動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件を検討してみたい。

3. 動作性を持つ[V+N]型複合名詞の分類と語例収集

3.1 動作性を持つ[V+N]型複合名詞の分類

動作性を持つ[V+N]型複合名詞を動作性を帯びる要因によって二分類した。第1類は、複合名詞の意味が動作性を持ち、かつその動詞的意味は複合名詞に対応する動詞句の意味と一致するものである。例えば、前述した「買い物」の動詞的意味は「物を買う」という動詞句の意味と同様である。第2類は、Nが動詞的名詞である場合に、Vの自他の如何に拘らず、[V+N]が動作性を持ちやすいものである。例えば「立ち話」における名詞要素「話」は動作性を有するので、[V+N]型複合名詞も動詞的意味を表しやすい。本稿では主に第1類の[V+N]型複合名詞を対象とする。

3.2 語例収集

語例を採集する前にまず動作性を持つ[V+N]型複合名詞の判断基準を明らかにしなければならない。動作性を持つ[V+N]型複合名詞はコトの意味を有するので、辞書の語釈には「...こと」のような説明がついているのが一般的である。先行研究（西尾 1998、金 2016）では「...こと」という辞書の語釈が[V+N]型複合名詞の動作性判断に使われているので、本稿も同じような方法を援用することにする。ただし、「延べ金」の語釈が「刀剣のこと」（『大辞泉 増補・新装版』）とあるように「...こと」は動作ではなく、物を表す場合がある。また、「出歯」の語釈は「上あごの前歯が前方に突き出ていること。また、その歯」（『大辞泉 増補・新装版』）における「...こと」は動作より状態を表す場合もある。このように語釈には「...こと」があっても動作を表さないものは動作性を持つ[V+N]型複合名詞として認めないことにする。

語例収集の方法に関して、本稿は先行研究の文献に出ている動作性を持つ[V+N]型複合名詞の語例の中から本研究の対象となるものを集める方針をとる。西尾（1998）は、『三省堂国語辞典 第四版』（1992年）から動詞的意味を表す[V+N]型複合名詞を網羅的に拾い、内省で補足した例を含めて合わせて150語を集めている。ただし、西尾の内省で選ばれた語の中に、上述の「延べ金」「出歯」のように物或いは状態を表し、動作性を持つとは言えないものが含まれているほか、「延べ首」のように辞書に載らず実際にもほとんど使用されていない語と、「塗り物」のように辞書には「...こと」の意味が記載されず、つまり動作性が見えない語がある。そこで、本稿では西尾（1998）

で集められた 150 語の実在性と動作性を再確認した。確認の基準は『大辞泉 増補・新装版』『明鏡国語辞典 第二版』『岩波国語辞典 第七版』の三冊の辞書の少なくとも一冊に登録されていればその語を実在の語として認める。動作性の判断も同じように三冊の辞書の少なくとも一つに「...こと」の意味が記載されていれば動作性を持つ語と判断する。確認した結果、西尾（1998）には実在性と動作性の条件を同時に満たさない語が 33 語あった。西尾（1998）の 150 語から「延べ金」「出歯」とこの 33 語を除外し、残りの 115 語だけを本研究に取り入れることにする。西尾（1998）をもとに、さらに影山（1993）から 9 語、野田（2011）から 15 語、金（2016）から 4 語を加え、合わせて 143 語を集めた。本研究の対象となる語例と出典は表 1 にまとめた。

表 1 本研究の対象となる動作性を持つ[V+N]型複合名詞の語例と出典

見出語	出典	語数 (計 143 語)
編み物, 洗い物, 頂き物, 写し物, 買い物, 書き物, 探し物, 調べ物, 染め物, 断ち物, 裁ち物, 継ぎ物, 繕い物, 解き物 (ときもの), 研ぎ物, 煮物, 縫い物, 張り物, 拾い物, 解き物 (ほどきもの), 彫り物, 貰い物, 読み物, 忘れ物, 上げ底, 合せ鏡, 合せ竿, 生け花, 入り婿, 入り目, 入れ髪, 入れ毛, 入れ墨, 入れ知恵, 入れ歯, 入れ札, 入れ筆, 入れ黒子, 入れ目, 打ち水, 埋め木, 置手紙, 置き文, 置き土産, 送り金, 押入簀, 押し葉, 押し花, 折り紙, 替え畳, 替え地, 嗅ぎ茶, 賭け馬, 借り家, 聞き香, 聞き酒, 切り首, 蹴鞠, 乞い婿, 差し油, 挿し木, 差し歯, 挿し花, 差し水, 差し湯, 晒し首, 据え膳, 捨て子, 捨身, 責め馬, 添え髪, 添え木, 反り身, 焚き火, 立て膝, 接ぎ木, 突き指, 作り酒, 付け火, 付け髭, 積み木, 積み金, 摘み草, 出穂, 出水, 出目, 飛び火, 留め湯, 取り木, 投げ櫛, 投げ文, 張り紙, 引き足, 踏み絵, 撒き餌, 巻き帯, 増水, 増目, 揉み手, 貰い子, 貰い乳, 貰い火, 貰い水, 貰い婿, 貰い息子, 貰い娘, 貰い湯, 盛り土, 盛り花, 焼き絵, 寄木, 呼び塩, 割り印, 割り判, 割り膝	西尾 (1998)	115
ひき眉毛, 回り道, 寄り道, 駆け足, 告げ口, 跳び箱, 落とし物, 干し物, 仕立て物	影山 (1993)	9
縛り首, 捨て駒, 摺り足, 積み樽, 買い葉, 当て木, 当て布, 贈り物, 返し針, 掛け湯, くわえ煙草, くわえ楊枝, 敷き砂, 投げ荷, 振り塩	野田 (2011)	15
急ぎ足, 忍び足, 片付け物, 作り話	金(2016)	4

4. 動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件

本稿では、動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件がはっきり見えるように動作性を持たない[V+N]型複合名詞と比較しながら分析していくことにする。繰り返し述べているように、動作性を持つ[V+N]型複合名詞の動詞的意味は名詞的意味の拡張に

よると考えられる。「打ち水」と「飲み水」のように、名詞要素を共有していながら、動作性が異なる[V+N]型複合名詞が多く観察されるので、本稿では同じNを共有する動作性を持つ[V+N]と動作性を持たない[V+N]を比較対象に決める。動作性を持つ[V+N]は表1にある語例を使用し、動作性を持たない[V+N]はオンライン辞書『デイリーコンサイス国語辞典 第三版』²から集める。具体的なやり方は、まず表1にある動作性を持つ[V+N]型複合名詞の構成要素Nをリストし、頻度3以上のNを選別する。選別されたNをそれぞれ『デイリーコンサイス国語辞典 第三版』の検索欄に入力し、検索条件を「後方一致」に指定して検索する。検索結果から[V+N]の語構成を持ち、かつ動作性を持たない和語複合名詞を拾う。動作性を持たないと判断する基準は語釈に「...こと」がないことである。そして前述した動作性を持つ[V+N]と同じように、一冊の辞書ではなく三冊の辞書で動作性の有無を判断する。つまり、『デイリーコンサイス国語辞典 第三版』の語釈に「...こと」がない[V+N]をさらに『大辞泉 増補・新装版』『明鏡国語辞典 第二版』『岩波国語辞典 第七版』の三冊の辞書で確かめて、いずれにも「...こと」がない場合だけ動作性を持たないと判断する。頻度3以上のNは表2にリストしている。上述したような検索方法で表2のNを含む動作性を持たない[V+N]を、そして表1から同じNを含む動作性を持つ[V+N]を集め、表3にまとめる。

表2 頻度3以上の動作性を持つ[V+N]型複合名詞の構成要素Nのリスト

N	物	木	水	花	火	目	湯	婿
頻度	24	7	5	4	4	4	3	3

表3 動作性を持つ[V+N]型複合名詞と動作性を持たない[V+N]型複合名詞

構成要素N	動作性を持つ[V+N]型複合名詞の語例	語数 (計 54 語)	動作性を持たない[V+N]型複合名詞の語例	語数 (計 87 語)
物	編み物, 洗い物, 頂き物, 写し物, 買い物, 書き物, 探し物, 調べ物, 染め物, 断ち物, 裁ち物, 継ぎ物, 繕い物, 解き物(ときもの), 研ぎ物, 煮物, 縫い物, 張り物, 拾い物, 解き物(ほどこきもの), 彫り物, 貰い物, 読み物, 忘れ物	24	乗り物, 出来物, 残り物, 紛い物, 敷物, 付き物, 光り物, 壊れ物, 混ざり物, 鳴り物, 生き物, 下り物, 汚れ物, 腫れ物, 入れ物, 切れ者, 壊れ物, 焚き物, 割れ物, 笑い物, 獲物, 刷り物, 語り物, 持ち物, 打ち物, 鋳物, 練り物, 掛け物, 置き物, 指し物, 建物, 履き物, 売り物, 食い物, 食べ物, 飲み物, 聞き物, 巻き物, 焼き物, 揚げ物, 炒め物, 和え物, 漬け物, 茹で物, 蒸し物, 判じ物, 添え	67

² <https://www.sanseido.biz/index.aspx>(参照 2018-09-11)

			物, 引き物, 吸い物, 預かり物, 考え物, 作り物, 儲け物, なくし物, 当て物, 織物, 着物, くだされ物, 食わせ物, 授かり物, 出し物, 出物, 嘗め物, 掘り出し物, 曲げ物, 見物, 呼び物	
木	埋め木, 挿し木, 添え木, 接ぎ木, 積み木, 取り木, 寄木	7	埋もれ木, 枯れ木, 朽ち木, 立ち木	4
水	打ち水, 差し水, 出水, 増し水, 貰い水	5	死に水, 逃げ水, 飲み水, 湧き水	4
花	生け花, 押し花, 挿し花, 盛り花	4	死に花	1
火	焚き火, 付き火, 飛び火, 貰い火	4	切り火, 残り火, 迎え火,	3
目 ³	入り目, 入れ目, 出目, 増し目	4	上がり目, 編み目, 下り目, 垂れ目, 吊り目,	5
湯	差し湯, 留め湯, 貰い湯	3	上がり湯, 出で湯, 煮え湯	3
婿	入り婿, 乞い婿, 貰い婿	3		0

4.1 VとNが「他動詞—目的語」関係である

先行研究では動作性を持つ[V+N]型複合名詞は漢語造語法の影響を受けたと指摘されている (Sugioka1986, 西尾 1998)。このタイプの [V+N] 型複合名詞の一部と同じ表記の漢語が実在し、意味もほぼ同様である、例えば『日本国語大辞典 第二版』における「蹴鞠 (けまり) / 蹴鞠 (しゅうきく)」と「挿し花 / 插花 (そうか)」の語誌を見ると、漢語の「蹴鞠 (しゅうきく)」は和語の「蹴鞠 (けまり)」より早い時期に使用され、漢語の「插花 (そうか)」と和語の「挿し花」は同じ時期に使用されたことがわかる⁴。漢語の「他動詞+目的語名詞」で構成された「述語—目的語」関係の造語法に倣って、動詞的意味を表す日本語の「動詞連用形+名詞」型複合名詞が作られたと考えられる。表1の動作性を持つ[V+N]型複合名詞の143語のうち7語だけ「他動詞—目的語」の構成ではない。この7語は「出穂」「出水」「出目」「飛び火」「回り道」「寄り道」「駆け足」である。漢語の語構成には「出現動詞+主体名詞」の構造があり、複合語全体は動詞的意味を表す。「出穂」「出水」「出目」はまさにこのような構造をしている。「回り道」「寄り道」は日本語では「述語—目的語」関係ではないが、中国語で

³ 「目」の意味が多様である。「弱り目」のように状態を表す「目」や「切れ目」のような区切りの箇所を表す「目」が名詞より接尾辞として扱われるのが一般的である。このような「目」を構成要素とする [V+N] 型複合名詞を対象外とする。

⁴ 『日本国語大辞典 第二版』における「蹴鞠 (けまり) / 蹴鞠 (しゅうきく)」と「挿し花 / 插花 (そうか)」の初出例の出典と年代は下記のとおりである。
しゅうきく【蹴鞠】[名]家伝 (760 頃) けまり【蹴鞠】[名]字鏡集 (1245 頃)。
そうか【插花】[名]骨董雑談 (1725 頃) さしばな【挿し花】[名]骨董雑談 (1725 頃)

は“绕道”のように「述語—目的語」関係として認められる。「駆け足」と「飛び火」はやや特別な存在なので、例外とする。表3にある動作性を持つ[V+N]と動作性を持たない[V+N]を比べると、動作性を持つ[V+N]は54語のうち96%(52語)が「他動詞—目的語」の内部構造を持つ。これに対して、動作性を持たない[V+N]87語のうち「枯れる」「逃げる」「死ぬ」などの自動詞を構成要素Vにするものが41%(36語)ある。また「入れ物」「迎え火」のような語は一見したところ、「他動詞—目的語」の内部構造を持つようであるが、Nが他動詞Vの目的語ではなく、付加詞である。動作性を持たない[V+N]の中に「他動詞—付加詞」の内部構造を持つものが8%(7語)ある。動作性を持たない[V+N]のうち、「食べ物」「飲み水」のような「他動詞—目的語」の内部構造を持つもの(44語)もある。なぜこれらの語は動作性を持たないのかについて次節で検討して行く。

4.2 Vが[V+N]型複合名詞の主体クオリアで、かつ[V+N]には潜在的な目的クオリアが存在しない

「他動詞—目的語」の構造を持つ[V+N]型複合名詞の全ては動詞的意味を有するわけではない。前述したように「食べ物」のような名詞的意味しか表さない語もある。同じ「他動詞—目的語」の内部構造を持つ[V+N]型複合名詞の中にどのようなものが動作性を持ちやすいだろうか。「食べ物」と「買い物」を例にしてみると、動作性を持たない「食べ物」と動作性を持つ「買い物」の区別の一つは動詞要素「食べる」と「買う」の実際の発生が複合名詞の意味形成に関与するかどうかにある。これは名詞のクオリア構造に関わっている。Pustejovsky(1995)は語の性質を四つの要素に分けて表示するクオリア構造を現代言語学に導入した。その四つの要素は構成クオリア、形式クオリア、主体クオリア、目的クオリアである。

構成クオリア (Constitutive Qualia) : 物体とそれを構成する部分の関係

形式クオリア (Formal Qualia) : 物体をほかの物体から識別する関係

目的クオリア (Telic Qualia) : 物体の目的や機能

主体クオリア (Agentive Qualia) : 物体の起源や発生に関する要因

(小野(2005:24))

ここで[V+N]型複合名詞の動作性に直接関わっているのは目的クオリアと主体クオリアである。例えば、「食べ物」「買い物」の下線部はそれぞれ複合名詞の目的クオリアと主体クオリアに当たる。Vが[V+N]型複合名詞の主体クオリアに当たる場合に[V+N]が動作性を持ちやすい。例えば、「食べ物」は「食べるための物」という意味で、「食べる」は「食べ物」の目的クオリアに当たり、「食べ物」の恒常的な属性を示しているだけで、実際に「物を食べる」という動作の発生に及ぶとは限らない。例えば、食べ物としてのりんごは腐るまで食べなくてもその「食べるための物」という性質は変わらない。これに対して、「買い物」は「買った物或いは買おうとする物」という意味で、「買う」は「買い物」の成り立ちを示す主体クオリアを果たす。「買う」という

動作が実際に発生しなければ「買い物」という物も存在しない。つまり、「買う」は「買い物」の成り立ちには必ず関与する。これについては小野（2014）にも示唆されている。しかし、Vが[V+N]型複合名詞の主体クオリアでさえあれば[V+N]型複合名詞が動作性を持つとは限らない。例えば、表2の動作性を持たない[V+N]型複合名詞の中に「建物」があるが、「建てる」は「建物」の成り立ちを示す主体クオリアに当たるが、「建物」は動作性を持たない。それはなぜだろうか。「建物」の意味は「人が住んだり、仕事をしたり、物をしまったりするために建てた物」（『大辞泉 増補・新装版』）である。つまり「建物」には「人が住んだり、仕事をしたり、物をしまったりする」という目的クオリアが潜在している。「建物」のような人工物はある目的に基づいて作られるのは普通である。「建物」の場合は目的クオリアが前景化し、主体クオリアが背景化することによって、「建てる」という動作は際立たなくなるのではないかと考える。同じようなパターンの語として「掛け物」や「置き物」が挙げられる。「掛ける」と「置く」は複合名詞の主体クオリアを果たすが、複合名詞の意味に「飾るために…」という目的クオリアが含意され、そしてそれが前景化することで、主体クオリアの「掛ける」と「置く」が見逃されてしまうのだろう。同じような理由で人工物としての「曲げ物」のような道具・容器類も動作性を持ちにくい。また「掘り出し物」のように、文字どおりの意味は「掘り出したもの」で、「掘り出す」は主体クオリアのように見えるが、「掘り出し物」が語用論的に意味を拡張し、「思いがけなく手に入った珍しい」という意味になってきた語がある。この場合に「掘り出す」の意味は評価を表す形容詞に近い。つまり、「掘り出す」は形式では「掘り出し物」の主体クオリアであるが、意味的には「掘り出し物」の形式クオリアになっている。そのため、Vの表すクオリアを判断するとき形式のみならず意味の方からも確かめる必要がある。

表3をみると、「他動詞-目的語」の内部構造を持つ動作的[V+N]型複合名詞のすべてはVが主体クオリアであるという条件を満たす。動作性を持たない[V+N]型複合名詞にも「他動詞-目的語」の内部構造を持つものが44語あるが、その中の27%（12語）はVが[V+N]の主体クオリアであるという条件を満たさない。残りの73%（32語）のうち、人工物による主体クオリアの背景化になるものが10語ある。では、表3にある「他動詞-目的語」の内部構造を持ち、かつVが[V+N]の主体クオリアである22語の動作性を持たない[V+N]型複合名詞はなぜ動作性をもたないのかについては後述する。

4.3 VかNを共有する動作性[V+N]型複合名詞が既存である

表1にある[V+N]型複合名詞にはVかNを共有するものが多い。Nとして生産性が高いのは「木」「湯」、Vとして生産性が高いのは「貰う」「差す」などが挙げられる。葉（2014）は、[N+V]型複合名詞の中に「-作り」の生産性が高いことについて認知現象の抽象化と事例化で分析している。本稿でいう[V+N]型複合名詞の動作性もこれに関わっていると考えられる。抽象化（abstraction）またはスキーマ化（schematization）と呼ばれる認知現象は、複数の経験からその共通する部分を抽出し、新たな構造を作る認知プロセスである。反対に、抽出されたスキーマから具体的な構造に応用される

認知プロセスは事例化 (instantiation) または精緻化 (elaboration) と呼ばれる。スキーマと似たような概念は国語学の西尾 (1988) にも示唆されている。西尾 (1988) は、新しい複合語の語形成は既存の複合語の実例から抽出された「型」を通して類推的創造 (analogical creation) が行われ、また「型」が有力であるかどうか、つまり、生産的な語形成パターンであるかどうかは既存の語の数に依存していると述べている。既存の複合語に共通の語構成要素が多ければ多いほど、その語構成要素がスキーマとして抽出され、規則として働く可能性が高く、新しい事例にも応用されやすい。ここで動詞要素 V として生産性が高い「貰う」を例にして、『日本国語大辞典 第二版』に収録されている[貰い+N]の複合名詞を 26 語集めた。

- (2) 貰い親, 貰い欠伸, 貰い方, 貰い子, 貰い棧敷, 貰い事故, 貰いタバコ, 貰い乳, 貰い手, 貰筒, 貰い年, 貰い殿, 貰い涙, 貰い人, 貰い主, 貰い腹, 貰い火, 貰い札, 貰い風呂, 貰い祭り, 貰い水, 貰い婿, 貰い息子, 貰い娘, 貰い湯, 貰い物,

線を引いたのは動詞的意味を有する語である。26 語のうち、「他動詞—目的語」の内部関係を持たないのは「貰い方」「貰い手」「貰い主」「貰い殿」「貰い人」の 5 語である。残りの「他動詞—目的語」の内部関係を持つ 21 語のうち、17 語が動作性を持つことがわかる。動作性を持つ[貰い+N]の複合名詞の既存語が多いので、同じように動作性を持つ新しい[貰い+N]も作られやすいというわけである。

動作性を持つ[V+N]型複合名詞は同じ分野で使われ、同じ構成要素を共有するグループ化現象がみられる。例えば「取り木」「接ぎ木」「曲げ木」は園芸用語で、「生け花」「挿し花」「押し花」は芸術用語である。ここでは、一部代表的な分野とその分野で使われている[V+N]型複合名詞を表 4 に挙げる。

表 4 動作性を持つ [V+N] 型複合名詞の使用分野

使用分野	語例
芸術	生け花, 挿し花, 押し花, 盛り花
園芸	挿し木, 接ぎ木, 添え木, 取り木
裁縫	編み物, 仕立て物, 繕い物, 縫い物
家庭	打ち水, 差し水, 貰い水

同じ分野で同じ語形成パターンが想起されやすいだろうと考える。

4.4 [V+N]型複合名詞の表す動作が想起されやすい

4.2 節で「他動詞—目的語」の内部構造を持ち、かつ V が [V+N] の主体クオリアである条件を満たすのに動作性を持たない[V+N]型複合名詞が 22 語あることを述べた。このうち「揚げ物」「茹で物」「和え物」「冷やし物」のような料理名詞が多いことに

づく。これに対して、同じ語構成を持つ料理名詞「煮物」が動作性を持つことは興味深い。これらの料理名詞はいずれも 4.1 と 4.2 の条件を満たすが、動作性の有無で違いを見せている。「煮物」は、「材料に調味した汁を加えて煮ること。また、煮たもの。」(『大辞泉 増補・新装版』) というふうに辞書にはコトの意味もモノの意味も記載されている。「揚げ物」は、『大辞泉 増補・新装版』には「...こと」の語釈がないが、『明鏡国語辞典 第二版』にはある。これに対して「茹で物」「和え物」「冷やし物」はいずれも辞書にはモノの意味しか記載されていない。このように同じ[V+物]の構成を持つ料理名詞でも動作性の程度に違いがあるが、その違いはわれわれの経験の親密性と関係があるのではないだろうか。つまり、日常生活の経験に馴染みが深い動作ほどそれを表す名詞が定着しやすく、それに関連する動作が想起されやすい。澤田(1999)は、「編み物」はコトの意味が認知されるのに、「織物」はコトの意味が認知されない現象について「<コト的意味>を見出すとは、モノから一連の動作を想起することである。動作を思い描くのは、我々自身の心が能動的に行うことであって、どんなに動作性を見出しやすい語であっても、我々の側でそれを思い描くことができなければ、<コト的意味>は見いだせない。我々が日常、経験的に馴染みのない動作は具体的に想起することが難しい」と指摘している。

4.5 N が V の格成分ではなく、かつ V 以外に N と共起性の高い動詞が容易に推定できる

第2節で「歩きタバコ」のような項関係を持たない動作性[V+N]が存在すると述べた。「歩く」は自動詞で、「タバコ」と「歩く」は格関係にはならない。「タバコ」と直接関係する動詞は「吸う」である。「歩きタバコ」は「歩きながらタバコを吸うこと」という意味を表す。このタイプの複合名詞の意味は「V1 ながら(て) N2 を V2」のように表示できる。V2 が容易に推定できるので、[V+N]型複合名詞では省略されている。似たような構造を持つ[V+N]型複合名詞として「歩きスマホ」「添い乳」なども挙げられる。「歩きタバコ」「歩きスマホ」「添い乳」はまだ辞書には載っていないが、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で「歩きタバコ」と「歩きスマホ」の実例がそれぞれ17件と9件検索されている。V2 が省略されることで二つの事象を一つの複合語で表しうるという点から見れば経済性が高い。このような語構造は一つの造語法として今後定着していくことも考えられる。

4.6 小まとめ

以上のように、本稿では[V+N]型複合名詞の内部構造、Vと[V+N]型複合名詞のクオリア構造との関係、同じ構成要素を共有する動作性[V+N]型複合名詞の既存語の多寡、[V+N]型複合名詞の表す動作の想起されやすさなどの面から動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件を分析した。まとめてみると以下のようなになる。

表 5 動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件

V と N との関係	成立条件	語例
N が V の格成分である場合	① V と N が「他動詞-目的語」関係である	蹴鞠, 挿し花
	② V が[V+N]型複合名詞の主体クオリアで, かつ[V+N]には潜在的な目的クオリアが存在しない	買い物
	③ V か N を共有する動作性 [V+N] 型複合名詞が既存である	貰い子, 貰い乳, 貰い火
	④ [V+N] 型複合名詞の表す動作が想起されやすい	煮物
N が V の格成分ではない場合	⑤ N が V の格成分ではない場合, V 以外に N と共起性の高い動詞が容易に推定できる	歩きタバコ, 添い乳

以上の条件で大部分の[V+N]型複合名詞の動作性を判断することができる。動作性を持つ[V+N]型複合名詞と動作性を持たない[V+N]型複合名詞は統語上相違がある。例えば、動作性を持つ[V+N]型複合名詞は「～をする」と結合して全体的に動詞のような機能を果たすが（例「打ち水をする」）、動作性を持たない[V+N]型複合名詞はそれができない（例「*飲み水をする」）。そのため、動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件を明らかにすることで日本語学習者の[V+N]型複合名詞への習得と運用にも貢献すると考える。

ただし、以上の条件はただ[V+N]型複合名詞が動作性を持ちやすい条件と言っておきたい。この条件を満たせば動作性を持つ[V+N]型複合名詞がいくらかでも作れるわけではない。そもそも単語には「可能な語 (possible word)」と「既存の語 (existing word)」がある（影山（1999：4））。理論的に存在するはずの語が実際に使われていないこと、いわゆる「偶然の空白」がよくある。この「偶然の空白」という現象は語形成においてごく普通のことである。

5. まとめと今後の課題

本稿では動作性を持つ[V+N]型複合名詞に着目し、複合名詞の内部構造、Vと[V+N]型複合名詞のクオリア構造における関係、同じ構成要素を共有する動作性[V+N]型複合名詞の既存語の多寡、[V+N]が表す動作の連想されやすさなどの面から動作性を持つ[V+N]型複合名詞の成立条件を考察した。成立条件が明らかになれば、学習者はある程度、どのような[V+N]型複合名詞が動作性があるのかが判断できるようになると考える。

本稿では、Nが動詞的名詞でない[V+N]型複合名詞のみを対象にその成立条件を論じてみたが、今後は、Nが動詞的名詞である[V+N]型複合名詞の考察も行いたい。

参考文献

小野尚之（2005）『生成語彙意味論』くろしお出版

- 小野尚之 (2014) 「N をスル構文における項選択と強制」岸本秀樹・由本陽子編『複雑述語研究の現在』pp. 17-40, ひつじ書房
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (1999) 『形態論と意味』くろしお出版
- 金恵珍 (2016) 「日本語「V+N」型複合名詞の動作性に関する研究」『日本言語文化』34, pp.109-209, 韓国日本語文化学会出版
- 澤田浩子 (1999) 現代日本語「ーもの」の複合名詞をめぐって—モノとコトの認知世界『KLS』19, pp.153-163
- 西尾寅弥 (1988) 『現代語彙の研究』明治書院
- 西尾寅弥 (1998) 「『摘み草』タイプの複合名詞について」『大妻女子大学文学部三十周年記念論集』3, pp.251-267, 大妻女子大学出版
- 野田大志 (2011) 「現代日本語における複合語の意味形成—構文理論によるアプローチ」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻博士学位論文
- 葉秉杰 (2014) 「日中両言語における動詞由来複合語の認知言語学的研究」東北大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻博士学位論文
- 松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』紀元社
- Sugioka, Yoko (1986) *Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English*, New York, Garland Publishing.
- Williams, Edwin (1981) “On the Notions ‘Lexically Related’ and ‘Head of a word’”, *Linguistic Inquiry* 12, pp.245-274.

調査資料

- 北原保雄 (編) (2010) 『明鏡国語辞典 第二版』大修館書店
- 国立国語研究所コーパス開発センター 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) データバージョン 1.1
- 佐竹秀雄・三省堂編修所 (編) (2000) 『デイリーコンサイス国語辞典 第三版』三省堂 (<https://www.sanseido.biz/index.aspx>) (参照 2018-09-11)
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 (編) (2011) 『岩波国語辞典 第七版』岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2000-2002) 『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 松村明 (監修) (1998) 『大辞泉 増補・新装版』小学館